

鈴木昭男

道草のすすめ — 「点音」 and "no zo mi"

2018-2019年

東京都現代美術館蔵

「点音(おとだて)」は、サウンド・アーティストのパイオニアとして知られる鈴木昭男の代表的なシリーズで、1996年から現在まで、世界30都市以上でおこなわれてきました。耳と足を合わせたマークをエコーポイントとして公共空間に設置し、人々の「聴く意識」の覚醒を誘いながら、日常を刷新する「道草=気づき」の感覚をもたらすものです。

東京都現代美術館における「点音」は、美術館の建物の中や外のあちらこちらに人々をいざない、その最終地点として、屋外展示場では、当館のためにつくられた階段状の作品、"no zo mi"が待ち受けています。

このパンフレットにあるマップを見ながらエコーポイントをたどり、そこに佇み、耳を澄ませてみてください。

#### [ 作家略歴 ]

1941年平壌生まれ。1963年、名古屋駅でおこなった《階段に物を投げる》以来、自然界を相手に「なげかけ」と「たどり」を繰り返す「自修イベント」により、「聴く」ことを探求。1970年代にはエコー楽器《アナラポス》などの創作楽器を制作し、演奏活動を始める。1988年、子午線上の京都府網野町にて、一日自然の音に耳を澄ます《日向ぼっこの空間》を発表。1996年に街のエコーポイントを探る「点音」プロジェクトを開始。ドクメンタ8(ドイツ、1987年)、大英博物館(イギリス、2002年)、ザッキン美術館(フランス、2004年)、ポン市立美術館(ドイツ、2018年)など、世界各地の美術展や音楽祭での展示や演奏多数。

「きづき」「あびる」音響設計：WHITELIGHT  
制作協力：宮北裕美

パンフレットデザイン：O-DESIGN CHANNELS  
© 鈴木昭男、東京都現代美術館



## 道草のすすめ

### おとだて 「点音」

道草なることが、益々スピード化する現代において置き去りにななってきているのを感じます。時々、深呼吸をするように耳澄ますことへ意識の切り替えをしてみたいものです。そのためのいざないが「点音(おとだて)」です。屋外にてお茶を点てる「野点」の行いも感性の一新に意味を見出したことに相違ありません。

「点音」は、環境のなかに置いた一つの音符です。耳と足の形をもじったマークの上に佇み、耳澄ましてみると、貴方はオーディエンスであると同時にコンダクターでもあります。

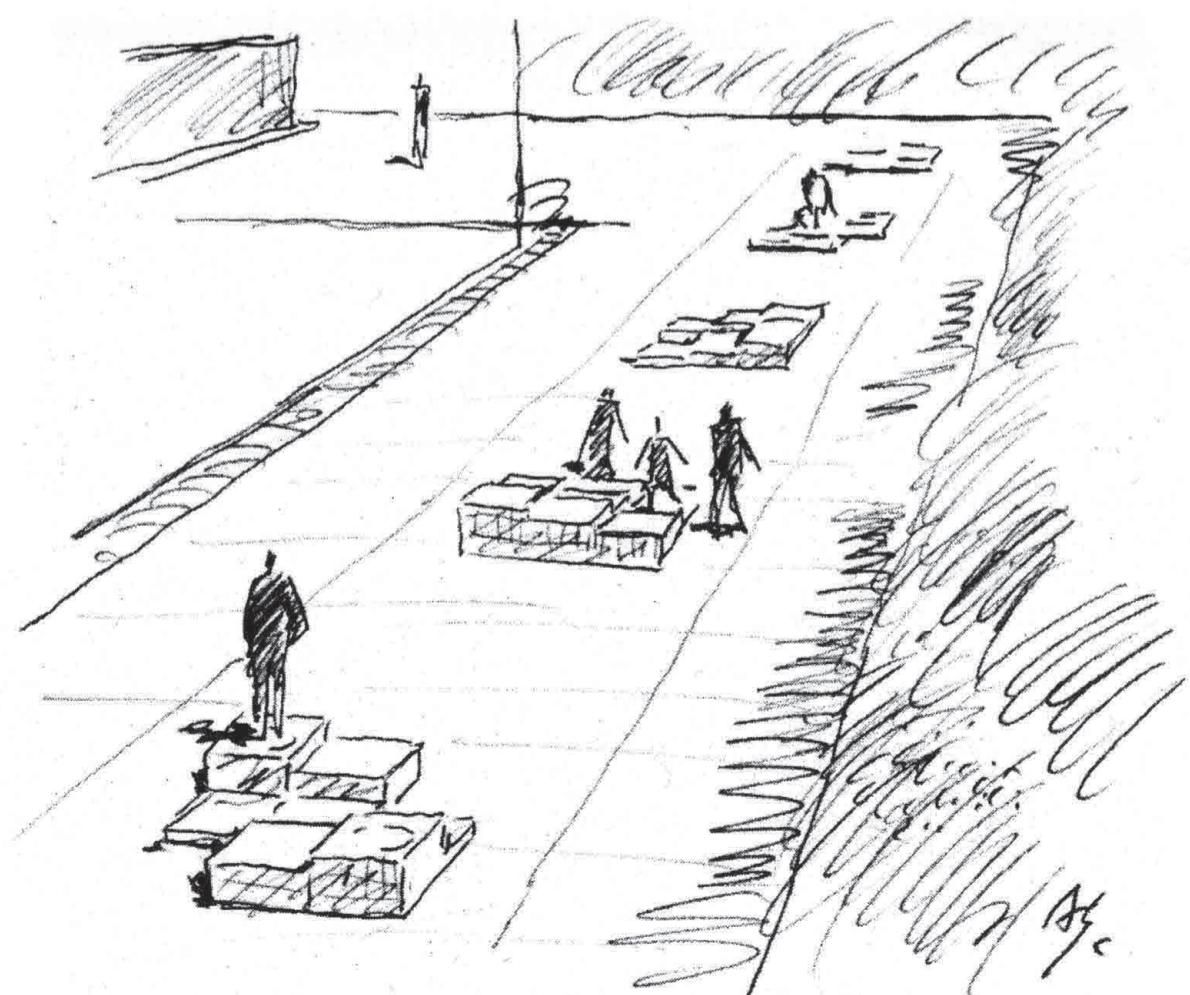
### "no zo mi"

屋外展示場に連ねて置かれた五体の階段状の作品は、コンクリートのプレートを積んで造られていて、五通りの法則から成り立った登り方を楽しむことができます。目線が高いと視界が新鮮に感じられることを、耳を澄ます行為に重ねた「点音」のバリエーションです。

それぞれの段上には「点音」のマークがレリーフされていますので、〈耳と足形〉から成るマークが指示する方向に足を揃えて立ち、暫し耳を遊ばせてみてください。

但し、一つの段上にだけは、マークがありません。各自で、耳を澄ます方向を探っていただるために…。

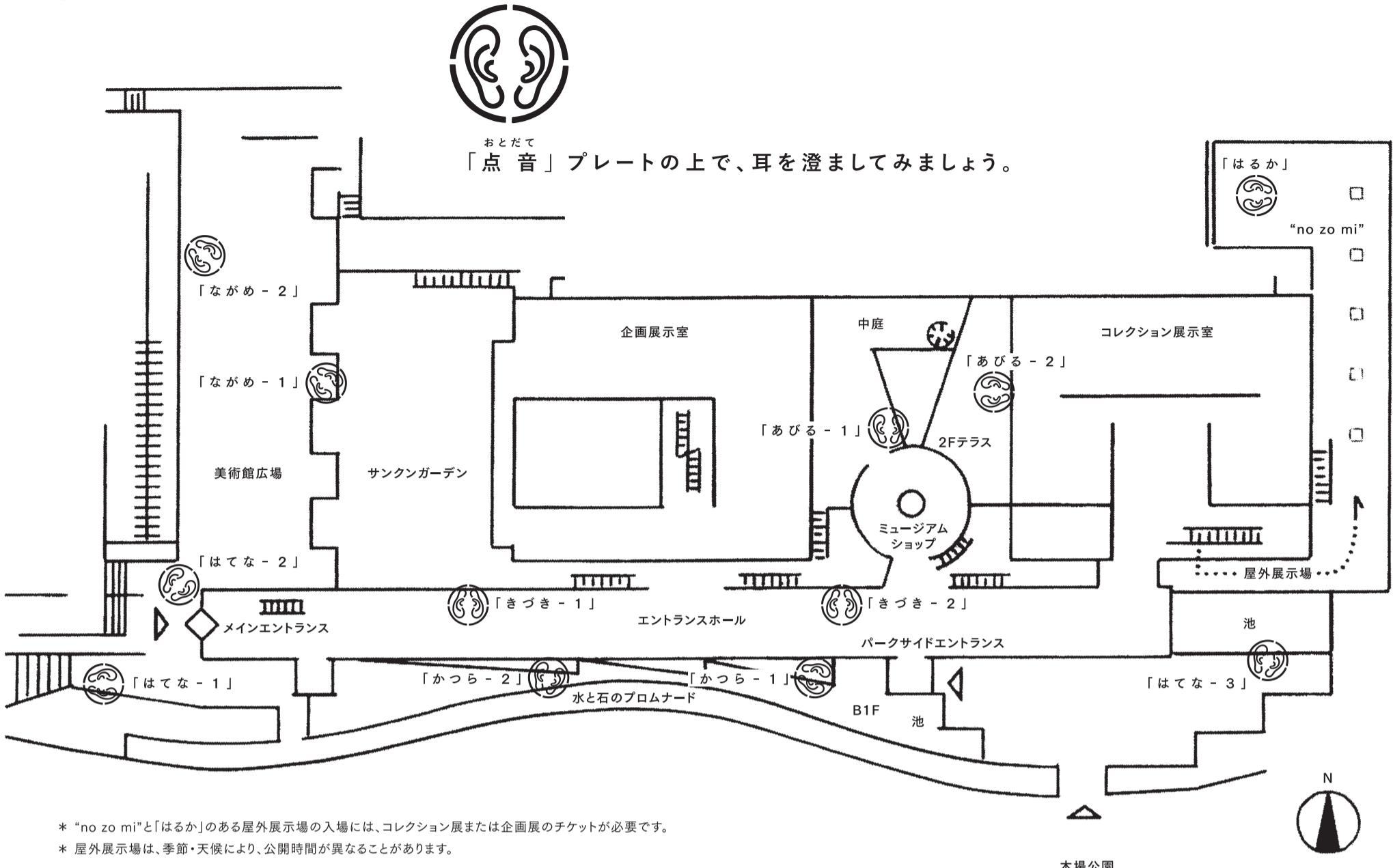
鈴木昭男



"no zo mi" のドローイング：鈴木昭男

- 道草のすすめ - 「点 音」 and "no zo mi" in 東京都現代美術館 マップ

鈴木昭男



「はてな - 1」

1F屋外

美術館の正面玄関にいたる通路の右に置かれた「点音」プレートの上に佇むと、美術館の大きな窓ガラスに映る空や木場公園の緑の景色が、シンメトリーになって目に届きます。それが聴覚にも作用するのでしょうか？

「きづき - 1」

1F

メインエントランスからエントランスホールを進むと、片隅に置かれた「点音」プレートに出会えます。そのマークに足を揃えて佇む時、ガラス張りの空間にもかかわらず屋外同様の素通しの音が耳に届いていませんか？

「はてな - 2」

1F屋外

メインエントランスの左横にある「点音」プレートは、美術館広場を一望する位置にあります。それを目にした来館者が、「なんだろう??」と、気にとめるために置かれています。

「きづき - 2」

1F

エントランスホールの中ほどにも、同プレートが待ち受けています。「きづき - 1, 2」は、館内のあちこちで出会う「点音」の佇み方のエクササイズの場にもなっています。  
(なお、ホール内の配置変えなどによって「点音」プレートの場所が変わることがあります。)

「はてな - 3」

1F屋外

パークサイドエントランス右手にある池に沿った「点音」は、プレートが指し示す先の屋外展示場への好奇心を誘うために敷設しました。

「あびる - 1」

1F屋外

鈴木昭男の音源をもとに音を感じる空間として制作された中庭には、二つの「点音」があり、ミュージアムショップのドアを出た右横のポイントは、音を浴びるのよい場所ですが、音浴は中庭のどこでも自由にできます。

「ながめ - 1」

1F屋外

美術館広場から手摺り越しに、サンクンガーデンを見下ろすポイント。折々の企画展示や、人の出入りの様子をドラマチックに俯瞰できます。

「あびる - 2」

2F屋外

中庭の螺旋階段を上がったテラスの壁の中程を背にするポイントは、カフェでくつろぐ人たちの語らいに耳澄ましているかのようです。そこに佇んでみると、前方の屋上の左右にある開口部が建物の耳のように思えてきませんか？

「ながめ - 2」

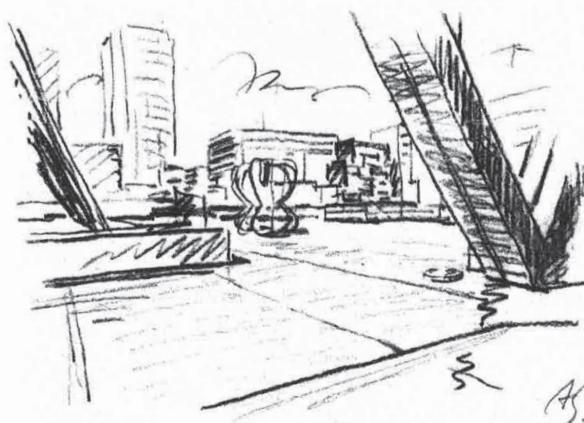
1F屋外

美術館広場のベンチのひとつに「点音」プレートが備えられています。そこに座って、ワイドな空間に耳を澄ますスポット。ゆとりある身体の置き方には、音のチャンスがおとずれることでしょう。

「かつら - 1」

B1F屋外

地下一階の泉水の組み石の端にあるポイントに足を揃えて座ってみると、京都の桂離宮にあるような曲り家形の佇まいから、木場公園界隈の音の反射が連なって耳に届くのを楽しめます。ただ、ガラス越しの目線に気を止めない修行の場でもあります。



「かつら - 2」

B1F屋外

この「点音」は、前方のガラスの映りを計算に入れ、わずかな位置関係で視界が整理されていることに気づかれることでしょう。そうした静謐さの中で、日和や時間帯によっては、水面の反映が聴覚に寄り添ってくれそうです。

「はるか」

1F屋外

この「点音」プレートの場所は、『日向ぼっこ空間』のあった京丹後市の、子午線の通る網野町高天(たかてん)山と、偶然にも北緯35度40分の線上で、はるか430kmを隔てて繋がっています。1988年に、鈴木昭男が遂行した〈自然に一日耳を澄ます〉プロジェクトのために制作した日干しブロックの空間壁に似た石壁から、7mの隔たりで真西に向かって置かれています。